

現代日本における DIY の展開と行為定着度に関する研究
—首都圏三地区における資材・技術入手方法に着目して—

建築学専攻
プロジェクトデザイン研究

DZ20017 ^{か み く ぼ え り}
上久保 衣梨
指導教員 山代 悟

序章 はじめに

0-1.研究背景

昨今の日本の社会課題として、建設費や資材単価の高騰、技能労働者人口の減少が挙げられる。現代日本に潜む問題に対し「自らの手でづくり、直す行為」に目を向けるべきではないだろうか。解決手段の一つとしての DIY を当研究で取り上げていきたい。

0-2.研究目的

DIY が課題解決の実践として機能するには、生活に継続的に根付く定着という要素が不可欠である。本研究では DIY の歴史や資材・技術の入手方法を文献やインタビュー調査から分析し、現代日本における DIY 行為の定着要因を考察する。

0-3.既往研究

既往研究の調査としては、DIY の言葉の定義や起源などの基礎的調査を基に展開している研究と、DIY の動機や DIY 実施内容を不特定多数の DIY 経験者に向けてアンケート調査を実施している研究が行われている。一方で特定の DIY 経験者に向けた資材や技術入手方法などの聞き取り調査を踏まえた研究事例が少数であり、「DIY 行為の実態」の調査分析は十分に行われていない。

0-4.仮説

既往研究の分析を踏まえ、本研究では「DIY 経験者の資材・技術入手経路、そして技術の使用方法が DIY 行為の定着と関係があるのではないか」という仮説を提示し、調査を通じて仮説に対する検証を行う。

0-5.研究方針

第 1 章では DIY という用語の経緯や定義を探り、第 2 章で DIY 史を年表形式でまとめ、DIY 行為の分類を行う。これらの章を踏まえ、第 3 章では実施した調査の概要と結果を述べる。また調査を通じて仮説に対する検証を行い、第 4 章では将来への提案を述べる。

第 1 章 DIY の定義

1-1.言葉の起源

アメリカの生活情報誌『Suburban Life』の中で「Do-It-Yourself」というフレーズが初めて使われた。¹⁾また第二次世界大戦後のイギリスにおいて政府は、市民による住宅復興運動のスローガンを「Do It Yourself (何でも自分でやろう)」とした。そこから「DIY」という言葉は拡大していく。²⁾

1-2.DIY の定義

1-2-1.各提言者による DIY の定義

各提言者による DIY の定義は、提言者が活動していた時代や文化、対象物の規模によって異なるが、住宅改修から家具や小物制作まで、広義の DIY として捉える場合が一般的である。²⁾また DIY から派生した言葉として「日曜大工」や「Home Improvement(以下、HI)」が挙げられる。

1-2-2.DIY と日曜大工

日曜大工は、アメリカでは HI と同義であり、休日に行う自宅の修理や家具制作行為を指す言葉である。1950 年代の日本でアメリカの生活様式への憧憬と当時の日本の社会情勢から生まれた趣味という位置付けであった。³⁾

1-3.本研究における定義

本研究で扱う DIY の定義は「その場所の利用者が自分の手で、もしくは他者と協働して材料加工、組み立て、装飾、完成品を利用する主体的行動」とする。

第 2 章 DIY の歴史と分類

2-1.DIY の歴史

DIY の形成背景は 18 世紀末のアメリカ産業革命まで遡る。産業革命へのレジスタンス運動やアーツアンドクラフツ運動、『Whole Earth Catalog』の台頭が起り、その後日本ではホームセンターの登場により DIY 産業が拡大した。現代ではインターネットの普及とデジタルファブリケーション技術の進歩により「開かれたものづくり」へと時代は変容しはじめている。

2-2.DIY 史の全体像

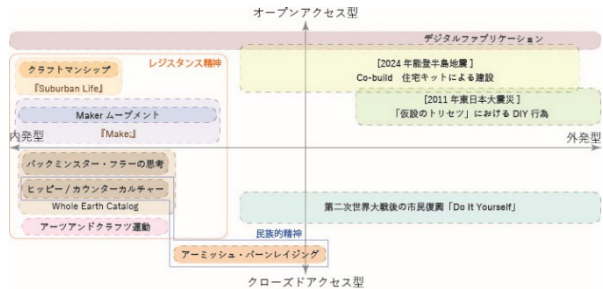
DIY の歴史の全体像を以下の表に示す。

時代	年号	主要な出来事	DIY 情報誌	DIY 情報誌：関連資料
18 世紀	18 世紀	アメリカ産業革命による職人分離と生産技術向上		
	18 世紀半ば	イギリス産業革命による生産技術向上と品質の低下		
	19 世紀	イギリス：アーツアンドクラフツ運動	ウィリアム・モリスによる『世紀』の普及 [1]	
	19 世紀後半	アメリカ：『craftsmanship』の精神 アメリカ：雑誌『Suburban Life』の中で 用語として初めて『Do It Yourself』記載	DIY の起源となる『Suburban Life』刊行 [2] バックミンスター・フラー『ダイマキシオン』著書出版 [3]	[1] [2] [3]
20 世紀	1945 年	イギリス：第二次世界大戦後の町の復興スローガン 『Do It Yourself』の拡大、DIY 運動の普及		
	1960 年		『Whole Earth Catalog』刊行 [4] テレビ番組での DIY 関連情報の放送	
	1960 年	日本初のホームセンターが開店	『日曜大工マガジン』創刊 テレビ番組『日曜大工 110 分』放送	[4] [5] [6]
	1970 年代	日本：DIY の文化が浸透、DIY 行為者が増加 『日曜大工』、DIY が趣味行為として拡大	1972 年『日曜大工 Do It Yourself』刊行 [5] 1973 年『Small is beautiful』刊行 [6]	
21 世紀	2000 年代	日本：リノベーション文化・DIY 型賃貸の導入	DIY 雑誌『Daps』刊行 [7]	
	2005 年	メーカームーブメント	テクノロジー系 DIY 工作専門誌『Maker』刊行 [8]	
	2008 年	YouTube (動画環境での情報共有) の普及 デジタルファブリケーションの導入	YouTube (動画環境での情報共有) の普及 『Shaposh』の導入と拡大	[7] [8]

【表 1.DIY の歴史年表】

2-3. DIY 行為の分類

歴史についての文献調査を踏まえ、本節では DIY 行為を「資材・技術への入手形態」と「行為に至る動機の発生源」という二つの分析軸から整理する。具体的には、前者をオープンアクセス型とクローズドアクセス型、後者を外発型と内発型として設定し、各 DIY 行為を二軸平面上に位置づけることで、その分布傾向および概念の近接関係を可視化する。



【図 1.DIY 行為の分類図】

第3章 調査概要と結果

3-1.調査概要

3-1-1.調査目的/調査対象

本研究のインタビュー調査対象者は東京都渋谷区、埼玉県越谷市、千葉県南房総市に活動拠点を置く計4名のDIY経験者とする。またアンケート調査では、インタビュー対象者Dが開催しているDIYスクールの受講者を対象とし、24件の回答を得た。

対象者	活動拠点	業種・活動
対象者A	東京都	カフェ・バー店主
対象者B	埼玉県	建設会社設計士
対象者C	千葉県	都内勤務・都市部と近郊部での二地域居住
対象者D	千葉県	DIYスクール・シェア里山

【表2.インタビュー調査対象者】

対象者	インタビュー調査対象者Dが主催するDIYスクールの受講生58名
調査方法	Google Formにて回答を回収
調査期間	2025年10月1日～11月30日
回収状況	24件/58件（41％）

【表3.アンケート調査概要】

3-1-2.調査項目

各調査の質問項目は、以下の表の通りとする。

インタビュー調査項目	
1.DIYの動機	着手に至った理由
2.DIYの実施内容	具体的な作成物
3.資材入手方法	使用材料をどこから仕入れたのか
4.技術入手方法	技術をどのように習得したのか
5.協働DIY経験の有無	DIYコミュニティの存在
アンケート調査項目	
1.DIYの動機	2.DIYの継続年数
3.直近1年間のDIY実施頻度	4.DIYの実施内容
5.資材の購入場所	6.購入以外の資材入手方法
7.DIYに関する情報の入手方法	8.質問7の情報入手方法の選択理由
9.技術習得方法	10.質問9の技術習得方法の選択理由
11.DIYの利点と欠点	12.DIYを中断した経験の有無

【表4.各調査の質問項目】

3-2.調査項目の分析

3-2-1.分析手法：調査結果からの要素抽出

各調査結果からDIY行為の定着に関わる5項目の要素を抽出した。本項では各要素について個別に考察を行う。

3-2-2.考察1：二種類の動機

DIYの動機には開始動機と継続動機が存在する。DIYの開始動機には経済的な側面、すなわち外発的な要因が作用する一方で、継続動機には他者との関わり合いの有無と、日常生活における問題解決手段という内発的な要因が作用するという結果が得られた。既往研究において江口は、調査を踏まえて「DIY経験者がDIYを行う主な動機は、日常生活の不便さの解消であると推測できる」と述べている。⁴⁾

3-2-3.考察2：資材のアクセスパターン

DIY経験者の資材入手方法について調査を行ったところ、「購入」と「購入以外」の資材へのアクセスパターンが見受けられた。資材を購入する場合、ホームセンターと材木店などの購入場所の違いが資材へのアクセスのし易さに影響を及ぼしているという知見を得た。またアンケート結果から、購入以外の独自の手段で資材入手するDIY経験者のDIY継続年数が長く、DIY頻度が高い傾向にあるという結果を得た。資材入手場所がオープンアクセスであることの入手確実性と、クローズドアクセスであることの特殊性という両者の性質がDIY行

為の定着に関係していることが推測できる。

3-2-4.考察3：技術のインプット

DIYに関する技術の入手手段は、精度の面と安全管理面に影響する。動画サイトでの技術習得は利便性が高い一方で妥当性の低さが懸念点であるため、技術習得には直接専門家や知人から習う傾向にあるという結果が得られた。またホームセンターで工具の使用方法の説明を受けて技術を習得するケースも見受けられた。

3-2-5.考察4：技術のアウトプット

習得した技術を用いてDIYを行う際の制作手順は、「ブリコラージュ型」と「エンジニアリング型」の二種類に分類される。直感的な創作形態から生まれるオリジナリティと、具体的なイメージ形成から始まる制作プロセスの着実性と達成感が、総じてDIY行為の定着要素であると考えられる。

3-2-6.考察5：DIYをめぐる関わり合い

対象者Dが実施するDIYスクールでは、床張りや階段作成などを地元の職人に依頼をした上でDIY受講生主体の協働DIYを実施する。DIYの知識とDIY仲間が相互に関係しあうことで生まれる「DIYのコネクション」とともに、その場で出会う仲間が行動モチベーションとなり、DIY行為の定着に結びつくであろう。

第4章 「DIY定着社会」に向けて

4-1.資材入手の仕組みの再考

前章までの内容を踏まえて、多様な資材入手パターンが存在する資材入手拠点の創出を提案する。ホームセンターやインターネット通販に見られる一般流通システムに購入以外の入手方法を付加することで、古材流入のイレギュラー性が介在する資材入手拠点となる。

4-2.循環と定着

資材の循環と共に、DIY経験者同士の交流が行われ、相互的な技術授受に繋がる。考察した五つの要素は各々が相互に影響を及ぼしながら循環的に作用する関係性を有しており、DIY行為の定着要素と深い関係性を持つといえる。

終章 終わりに

DIYの定着に関わる要素についての仮説立てを行い、調査を通じて分析と考察、検証を実施した。当研究がDIY行為の定着に対して新たな視点をもたらし、今後の日本においてDIYの展開可能性を高めていく一助となることを望む。

参考文献

1) Atkinson Paul, Do It Yourself: Democracy and Design, Journal of Design History, 2019, 19(1), p.1-10
2) 溝尻真也, DIY研究の視点—英米を中心とした研究動向の日本での展開可能性—, 目白大学総合科学研究, 2020, 16,p.99-110
3) 溝尻真也「日曜大工の社会史—男性の手作り趣味と家庭主義」, 神野由紀・辻泉・飯田豊編著, 趣味とジェンダー—〈手づくり〉と〈自作〉の近代—, 青弓社, 2019, pp. 286-310
4) 杉村皓太・江口亨, DIYの動機とノウハウ獲得に関する基礎的研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2022, 2022, p.1049-1050